

ど沼の水は静である、庭とも見えるとて微笑まれました。又浅間山の鈴蘭の花、北海道の鈴蘭の花、この比較話も出ました。その後、私は大下さんにはあまりお目にかゝらなかつたが、すゞ蘭の香による黄な蝶々の繪葉書や、其の外のを折りく、旅行先きから下さいました。で、お情の温かい畫伯はいつもお達しやだと思つてをりました。と、先日突然正男さんから黒枠のお葉書でした。私は非常に驚きました。どうしても夢としか思ひませんでした。旅行！大下さんは只今も矢張り旅行を——お宅へ返り得らるゝ旅行をつゞけてゐらつしやると私には思はれます。深い林や静なく、湖の畔で、淋しい景を獨りで靜に畫いてゐらつしやると思はれますが。

## 思おもひ出いで多おほきアルバム

神 東 惇

△大下君は逝かれた、何の合圖もせずに突然逝かれた、自分には宛然夢の様に思はれる、逝かれるならなせ前に知らせて呉れなかつたらう、「海洋」の表紙も頼むのだつた、瀬戸内海の大物も御願するだつた、何時でも出来ると思つて居たが……ア、……モ！大下君には此の世では何にも畫いてもらへぬ！君の柩を秋深き雑司ヶ谷に送つた三日目の夕、虫の聲に圍まれた家の内にアルバムを繰り廣げつゝ、新に逝きし友の傍を忍ぶ。

△最初目に着いたのは四十一年の五月上野精養軒で開いた太平洋畫會の晚餐會席上で自分が紀念に書いてもらつたもの、一枚の葉書の上に鷗外博士の「案心」と云ふ題字、吉田君のアラビヤ文字、満谷君、石川君、河合君等の自畫像の下に「汀鷗」と小さく書いたのが君で畫題を付くる可否を論じた後であつたと思ふ、君の署名は何時でも是れで自畫像は書いたことがない様だ。

△其の次ぎのは多摩川の日向和田からよこされた畫葉書で杆の輪廓の中に河原を見せ下に「昨日多摩川畔へ參り候昨年来濁水に相成景致を失ひ申候」とある、君は僕の畫葉書好きを知つて居られたので、旅行先から毎度肉筆の畫葉書を送られる、それが又僕には何よりの愉快で皆アルバムに挟んである。

△尾瀬沼の漁師小屋に五夜を過し只今日光へ參り候委しくはその内拜眉萬々湯本にて」とあるは例の尾瀬沼行の紀念葉書で確か四十一年の七月であつた、此の畫葉書を受取つた時自分は日光山の奥の奥の大寂寞の内にある眞珠の様な水を何んなに想像したであらう。

△數株の枯木水に映じ、人なき船の渚に捨てられたるスケッチの下に「景色は實によいが雨の爲めに富士が見えません二三日中に歸ります」とペンの走り書きは四十一年の十一月甲州山中湖の秋を訪ふて旅宿中屋から出されたもの、富士へ登つて見るのは參りに悪くどい餘りに露骨だと云つて裾野を愛する君の主義が思ひ出される。

△君が僕に寄せられた最後の葉書は八月三十一日附のもので海洋會の瀬戸内海旅行中、船の中で發行した海洋新聞を贈つた返事で「いつも趣味方面の御盡力敬服致候」云々と大に海洋旅行に賛成された、君等で作つた「寫生一週」の最初の製本を貰らつて其れを見つゝ内海を巡遊した爲め大に趣味と實益を得た自分は「先頃は瀬戸内海の遊覽有之候由定めて面白き事も多かるべく存候いづれ拜眉のせつゆるゝ御伺申上候」との君の手紙にゆるりと會合して大に内海の景觀を聞かうと思つて居たに……其れも果たさないで此んな思出でを書くことゝなつた。

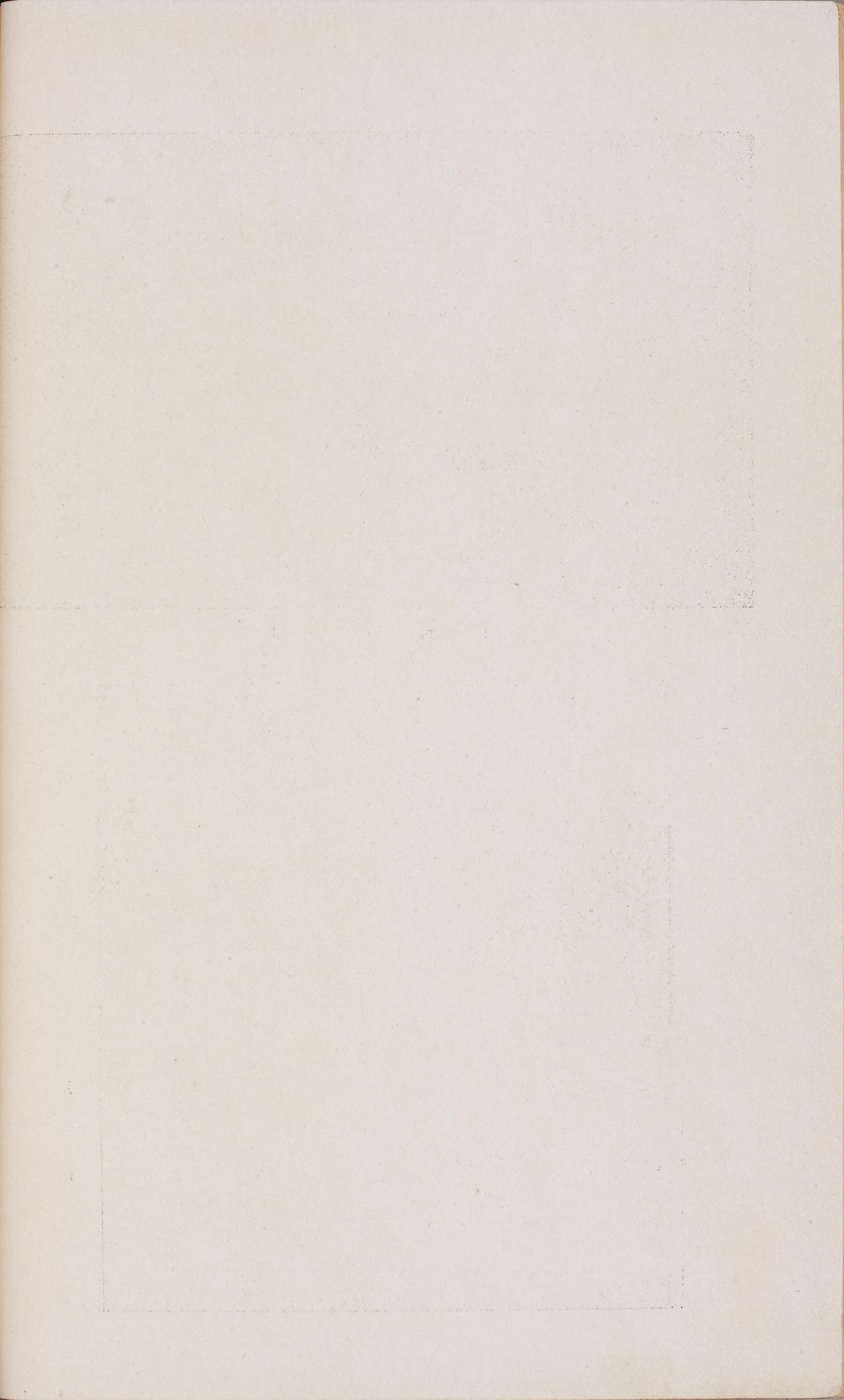
△去年の一月稀有の大雪の日に山岳會の晩餐會を代々木の志賀四松庵に開いたが、其の時君と晚霞君と僅か三人が幹事役であつた、四松庵を良く知つてる筈の僕でさへ大雪の爲めに迷つてしまつた、初めての君は妻君同伴で代々木の大練兵場の内で迷つてしまひ終には足袋洗足とまでなつて一時間も雪の上を右往左往した末やつと會場に着かれたさうであつたが、其れでも當日の先登第一、遅ればせの僕は大に申



葬 式 の 前 日



墓 前



譯がなかつた、君が何事にも責任を重んじパンクチュアルに振舞はるゝのは君を知る人の何れも敬服する所で君が成功の要素であつたらうと思ふ。其の席上で會員中の絶頂派と裾野派を分けて見たが君は無論裾野派の勇將、展覧會毎に見る君の作品は遺憾なく是を證明して居る。

△水彩畫家としての君は一面に於て文章家である、批評家である、雄辯家である、そして敏腕な事務家である、君の文章は水彩畫の如く批評は極めて穩健、辯舌は爽かにして然も細微に亘り、委曲を盡す、其の上藝術家に稀に見る常識と經營の才は「みづゑ」の今日を現した所であらうと思ふ、其の「みづゑ」迄も君の長逝と共に廢刊することゝなつたのは僕に取つては實に二重の悲みである。

## 大下先生の著述に就いて

大阪 一 愛 讀 者

先生の著述を三大別に出來る。純なる畫家には歐米の例でも著述は少い様だ、少いのなら未だよい、其作品はあつても、全然皆無の人々もある。中には自ら師導に専ら従事して、終に著述のために、立派なる作品を得る機會を失つた人々もある。歐米の事は詳しく知らないから申憎いが、我國では三宅克己先生、淺井忠先生、小山先生等はあるが、皆義務的とか、専ら師導の爲とかに出來て居つて、永く愛好する書物もあるが、多く眼が肥え耳がさとなつて、打捨てられる物が多い。

我々の先覺者であり、恩人である大下先生と、一番親しみの深い根本義は、先生最初の著述「水彩畫階梯」であつたらう、あの書物の内に、挿入せられた巻頭の石版、殊に寫眞版水彩畫には、どんな色彩をして居るだらうと、今日でも記憶にある懐かしい追憶だ更に私淑する様に到つたのは精巧なる「風景畫帖」であつた、近くは畫家連合著の「瀬戸内海一週」寫生旅行、「最近水彩畫法」等である。近日出た單獨の「水彩寫生旅行」は實に我々